

# The First Africans' Arrival in Virginia : The Recent Scholarship and New Explanations

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 円 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6870">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6870</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# ヴァージニア植民地に連れて来られた初めてのアフリカ人 －近年の研究とそれに基づく新しい説明－

佐藤 円

キーワード：1619年、ヴァージニア植民地、初めてのアフリカ人、私掠船、アンゴラ、サン・ファン・パウティスタ号

## はじめに

1619年の夏、アメリカの歴史にとって転換点となる二つの出来事がヴァージニア植民地で起こった。その一つは、北アメリカにあったイングランドの植民地初の代議制議会が、7月末から8月初めにかけてジェームズタウンで開催されたことである。この出来事は、しばしば歴史の教科書などで「アメリカの民主主義の起源」の一つとして説明されてきたものであるが、実際には30人弱の男性有力者のみが参加した会議が開かれたもので、「民主主義の起源」という評価はいささか大げさである。これに対して、8月末にヴァージニア植民地に初めてアフリカ人<sup>1</sup>が連れて来られたというもう一つの出来事は、前者に比べれば教科書などでの扱いは小さいものの、はるかに歴史的重要性は大きい。なぜなら、こちらのほうは明らかに「アメリカにおける奴隷制の起源」の一つと言えるからだ<sup>2</sup>。このように、民主主義と奴隷制というアメリカの歴史の表と裏を象徴する二つの構成要素が、

- 1 本稿では、祖先もしくは本人がアフリカ出身のアメリカ人一般に対しては「アフリカ系アメリカ人」という呼称を、ヨーロッパ出身の場合には「ヨーロッパ系アメリカ人」を、アメリカ出身の場合には「アメリカ先住民」を使用するが、文脈によっては「アフリカ人」「ヨーロッパ人」「イングランド人」「パウハタン族」も、また「人種」について論じる際には、それぞれ「黒人」「白人」「インディアン」という呼称も併用していく。
- 2 これまでしばしばこの1619年の出来事がアメリカにおける奴隷制の起源であると象徴的に語られてきたが、アメリカ大陸全体から見れば、すでに16世紀の初めからアフリカ人奴隷の使用がスペイン植民地で開始されていた。またイングランド植民地に限って言えば、1616年からバミューダでアフリカ人奴隷の使用が開始されている。Michael Jarvis, "Bermuda and the Beginning of Black Anglo-America," in Paul Musselwhite, Peter C. Mancall, and James Horn, eds., *Virginia 1619: Slavery and Freedom in the Making of English America* (Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press, 2019), pp.108-132.

偶然同じ年の同じ場所にその起源を求められるということは、かつて歴史学者のエドモンド・モーガン（Edmund Morgan）が評したように、まさに「アメリカのパラドックス」であると言える<sup>3</sup>。

さて昨年2019年は、上記の二つの歴史的な出来事が起こってからちょうど400年目に当たっていた。そこで二つのうち特に後者に関心があった筆者は、初めてアフリカ人が連れて来られたと史料が伝える時期に合わせて、8月下旬にヴァージニア州のジェームズタウンやジェームズ川の河口からチェサピーク湾に突き出た半島にあるハンプトン市など、この出来事にゆかりのある土地を訪ねた。すると、かつてヴァージニア植民地の中心地であったジェームズタウンの史跡（Historic Jamestowne）や野外博物館（Jamestown Settlement）では、400周年を記念した特別展や来訪者向けのウォーキング・スタディー・ツアーが行われており、またハンプトン市でも2019年記念委員会（Hampton 2019 Commemorative Commission）が組織され、8月23日からアフリカ人の上陸日とされている25日にかけて、上陸地点の同市内ポイント・コンフォート（Point Comfort）における式典を中心に様々な行事が催されていた<sup>4</sup>。他方アメリカ政府も2018年1月に議会でアフリカ系アメリカ人史400年委員会法（The 400 Years of African-American History Commission Act）を成立させて、400周年を記念する行事や研究教育活動に助成を行う臨時の専門委員会を国立公園局内に設置するところを決め、上記のハンプトン市のものをはじめとするアメリカ各地で実施された行事や活動への助成を行った<sup>5</sup>。またこのような行政側の対応に加え、雑誌や新聞などの各種メディアも、8月を中心にアフリカ系アメリカ人の400年間の歴史を回顧する様々な特集を組み、さながら8月はアフリカ系アメリカ人歴史月間の様相を呈していた<sup>6</sup>。

3 Edmund Morgan, "Slavery and Freedom: The American Paradox," *Journal of American History*, vol. 59, no. 1 (1972), pp. 5-29; do., *American Slavery, American Freedom: The Ordeal of Colonial Virginia* (New York: W. W. Norton, 1975), pp.5-6. なお、1619年に北アメリカのイングランド植民地初の代議制議会が開催されたジェームズタウンを「民主主義の誕生の地」として顕彰することに比べて、そこにアフリカ人が初めて連れて来られた事実が注目されない問題性については、アフリカ系アメリカ人の歴史学者のロバート・トレント・ヴィンソン（Robert Trent Vinson）が<sup>3</sup>、"Jamestown-centered origin story: the beginning of American democratic freedom" と批判している。"The Birthplace of American Democracy?: The Historical Meaning of 1619 Jamestown and its Contemporary relevance for 2019 America," August 5, 2019, <https://www.wm.edu/sites/1619/news/birthplace-of-american-democracy.php> (accessed in December 11, 2019).

4 "First African Walking Tour" in Historic Jamestowne, <https://historicjamestowne.org/visit/calendar/first-africans-tour-1/> (accessed in November 26, 2019); "'Tenacity' Special Exhibition at Jamestown Settlement," <https://www.historyisfun.org/about-us/news/media-kit/tenacity-special-exhibition/> (accessed November 26, 2019); "The Hampton 2019 Commemorative Commission," <http://hamptonva2019.com/> (accessed November 26, 2019).



写真1 アフリカ人の上陸地点ポイント・コンフォートの史跡案内板（筆者撮影）

このようななか現地を訪れた筆者は、博物館の展示、ウォーキング・スタディー・ツアー、新聞や雑誌の記事、書籍を通して、1619年のヴァージニア植民地への初のアフリカ人到来に関する様々な説明に触れる機会をもったが、それらの説明には筆者がこれまで知らなかったことがらが多数含まれていた<sup>7</sup>。むろんアメリカ先住民史研究が専門である筆者の知識不足は否めないものの、日本で刊行されている概説書などにはあまり書かれていない詳しくて目新しい説明を前に、この出来事の歴史的な重要性について認識を新たにした<sup>8</sup>。そこで本稿では、アフリカ系アメリカ人史研究の門外漢であることは断った上で、1619年のアフリカ人の到来が現在ではどのように説明されるようになってきているのか、近年の研究と利用可能な史料を参照しながら整理していきたいと考えている。

## 1. 初めてのアフリカ人到来を伝える基礎史料

まず初めに、この問題の基礎史料から説明をしておきたい。これまでながらく1619年のヴァージニア植民地への初のアフリカ人到来という出来事については、以下の史料をもとに語られてきた。それは、パウハタン大族長の娘であるポカホントス（Pocahontas）の寡夫で、ヴァージニア植民地で輸出用のタバコ栽培に初めて成功したことで知られるジョン・ロルフ（John Rolfe）<sup>9</sup>が、ヴァージニア会社の総裁エドウィン・サンズ（Edwin Sandys）に宛てた1620年1月の手紙である。そのなかでロルフは、サンズに以下のように報告している。

5 “400 Years of African-American History Commission,” <https://www.nps.gov/orgs/1892/africanamericanhistorycommission.htm> (accessed in November 26, 2019); “H. R. 1242-400 Years of African-American History Commission Act,” <https://www.congress.gov/bill/115th-congress/house-bill/1242/text?overview=closed&r=58> (accessed in November 26, 2019).

8月の終わり頃、160トンのオランダの軍艦が一隻ポイント・コンフォートにやって来ました。指揮官の名前はジョープ（Jope）船長で、彼の西インドへの水先案内人はイングランド人のマーマデューク（Marmaduke）氏でした。彼らは西インドでトレジャラー号（the Treasurer）と出会い、僚船となることに決めてこちらへ向かいましたが、途中ではぐれてしまいました。船には20人あまりの黒人（20. And odd Negroes）しか積まれていませんでしたが、それを総督と岬の商人は可能な限りの安値で食糧を（船にはそれが非常に不足しているとのことだったので）対価にして購入しました。船は西インドを巡って、略奪品を持ち帰るために、彼らの君主から出されたりっぱで十分な内容の委任状を持っていました<sup>10</sup>

- 
- 6 そのようなメディアによる歴史の回顧と見直しという点では、ニューヨーク・タイムズが『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』8月18日号で企画した“The 1619 Project”と題した特集が出色であった。この特集には、アメリカの歴史をアフリカ系アメリカ人の視点から回顧し、いかにアフリカ系アメリカ人がアメリカの民主主義や社会の発展に寄与してきたのかを明らかにするとともに、今日「黒人問題」としてアフリカ系アメリカ人に責任転嫁されていることがらのほとんどが、実際にはアメリカの主流社会によって作り出されてきたものだと告発する論説が多数掲載されていた。*The New York Times Magazine*, August 18, 2019. また、この『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』の企画をもとに10月30日には、ワシントンDCの国立アフリカ系アメリカ人博物館で“The 1619 Project: A Symposium On Reframing History”と題したシンポジウムも開かれた。“The 1619 Project: A Symposium On Reframing History | National Museum of African American History” <https://nmaahc.si.edu/1619-project-symposium-reframing-history> (accessed in December 6, 2019). その一方でこの企画に対しては、歴史を歪曲しているとの批判が白人の保守派ばかりか歴史研究者からも出され、ニューヨーク・タイムズとの間で論争が続いている。<https://www.nytimes.com/2019/12/20/magazine/letter-to-the-editor-historians-critique-the-1619-project-and-we-respond.html> (accessed in December 24, 2019).
- 7 そのような新しい説明が書かれている書籍の代表としては、ヴァージニア植民地における代議制議会開催とアフリカ人の到来400周年を記念して、ジェームズタウン史跡を管理するJamestown Rediscovery Foundationの理事長で歴史研究者のジェームズ・ホーンが出版した以下の新刊本が挙げられる。James Horn, *1619: Jamestown and the Forging of American Democracy* (New York, N. Y.: Basic Books, 2018).
- 8 管見のかぎり、筆者は以下の著書以外で近年の研究を反映したアフリカ人到来に関する説明を日本で目にすることがない。和田光弘『植民地から建国へー19世紀まで』（シリーズアメリカ合衆国史①）岩波書店、2019年、30-31頁。
- 9 ポカホンタスおよび彼女の夫ロルフについては、拙稿「史料が語るポカホンタス」『大妻比較文化』16号（2015年）77-99頁を参照。

この手紙こそ、これまで北アメリカの大陸部にあったイングランド植民地に連れて来られたアフリカ人に関する最古の記録とされてきたものである。ちなみにこのアフリカ人の到来に関しては、同時代人であるジョン・スミス (John Smith) もその著書『ヴァージニアの歴史』 (*The General Historie of Virginia, New-England, and the Summer Isle*) のなかで、「8月の終わりにオランダの軍艦がやって来て、我々に20人の黒人を売った」と記している。しかし、この著書の執筆時にスミスはすでにイングランドに帰っており、この記述はロルフの手紙を典拠にしたものと思われる<sup>11</sup>。上記の報告に述べられている通り、ロルフは初めてのアフリカ人をヴァージニア植民地へ連れてきたのは、オランダ総督から発給された私掠免許 (letter of marque) を持つ「オランダの軍艦 (Dutch man of Warr)」であったとしている。ロルフさらに続けて、同じ手紙で以下のようにも報告している。

3、4日後トレジャラー号も到着しました。船は到着直後に総督に対し自らの希望を伝えてきました。総督は手紙を書いて、私とピアース (Peace) 大尉とユーウェンス (Ewens) 氏に船まで行くように依頼し、船にジェームズ・シティまで遡上して来るように伝えさせようとしてしました。しかし私たちが着く前に船は出帆し、湾から出て行ってしまいました。そうなったきっかけは、船では食糧が大変不足していたのに、キコタン (Kecoughtan) の住民たちから非友好的な扱いを受け、船もその乗組員も、何も補給することができなかったからです。船は、もし私たちがポイント・コンフォートに大砲を設置しなければ、この植民地はすぐに滅んでしまうと (キコタンに停泊していた間に) 告げたそうです。西インドでスペイン人に (言われた話) から判断すると、スペイン人が来春ここにやって来るのは間違いないとのこと…<sup>12</sup>

以上のように、途中ではぐれたトレジャラー号も「オランダの軍艦」に続いてヴァージニア植民地に到着したのであるが、このトレジャラー号と「オランダの軍艦」はそれぞれどのような船で、なぜ僚船となり、西インドでは何をしてきたのか。またアフリカ人たちは、どこから、どのようにしてヴァージニア植民地に連れて来られたのか。さらにトレジャラー号はポイント・コンフォート近くにあったイングランド人入植地キコタンの住民からなぜ「非友好的な扱い」を受け、その後どこへ行ったのか。この後は、これらのことについて順を追って説明していきたい。

---

10 John Rolf to Sir Edwin Sandys, January, 1619/20, in Susan Myra Kingsbury, ed., *The Records of the Virginia Company of London* (Washington D. C.: Government Printing Office, 1933), vol. 3, p. 243.

11 Philip L. Barbour ed., *The Complete Works of Captain John Smith (1580-1631)* (Chapel Hill, N. C.: University of North Carolina Press, 1986), vol. 2, p. 267.

12 Rolf to Sandys, in Kingsbury, ed., *The Records of the Virginia Company of London*, vol. 3, pp. 243-244.

## 2. トレジャラー号

まず、残されている情報が多いトレジャラー号がどのような船であったのか説明することから始めたい。この船は、第二代ウォリック伯ロバート・リッチ (Robert Rich, 2<sup>nd</sup> Earl of Warwick) が所有していたイングランド船で、初期のヴァージニアやバミューダの歴史にその名がたびたび現れる。例えば、1613年にポカホントスがヴァージニア植民地側に誘拐された時に騙されて乗せられたのはこの船であったし、1616年に彼女が夫のロルフらとともにイングランドに渡った時に乗ったのもこの船であった。その当時の船長はサミュエル・アール (Samuel Argall) であったが、彼が1617年にヴァージニア植民地の代理総督となると、1618年以降はダニエル・エルフリス (Daniel Elfrith)<sup>13</sup>に船長が代わった。トレジャラー号は、1613年から18年にかけてイングランドと植民地との間で人や物資の運搬を担うと同時に、1616年からはウォリック伯リッチの指示で私掠船としても活動していた<sup>14</sup>。

このトレジャラー号が1619年8月末か9月初めにヴァージニア植民地に「オランダの軍艦」とともにやって来た事情については、2隻の船が到着した直後の9月末にヴァージニア植民地総督の補佐官ジョン・ポリー (John Pory) が、当時オランダにいたイングランドの外交官ドーチェスター子爵ダドリー・カールトン (Dudley Carleton, 1<sup>st</sup> Viscount Dorchester) に宛てて書いた手紙に説明がある。ちなみにこの手紙は、「手紙を託すのにちょうどよいフラッシング (Flushing) の軍艦と遭遇しましたので」<sup>15</sup>という文言から始まるが、ここでポリーが言う「フラッシングの軍艦」の「フラッシング」とは、オランダのゼーラント州にある港町フリシンゲン (Vlissingen) の英名であり、その軍艦とは、ロルフの報告にある「オランダの軍艦」のことを指している。ポリーの説明は以下の通りである。

…この船 (フラッシングの軍艦 - 筆者付記) がここへやって来たのは、同様にイングランドの軍艦で、合法的にスペイン人から戦利品を鹵獲するための委任状をサヴォイ

13 トレジャラー号の船長エルフリス (Elfrith) の名前は、史料によってはエルフレッド (Elfred) と表記されているが、本稿では史料引用以外は「エルフリス」で統一する。

14 Mark G. Hanna, *Pirate Nests and the Rise of the British Empire, 1570-1740* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2015), pp. 73-74; “Robert Rich, Earl of Warwick,” in Vernon A. Ives, ed., *The Rich Papers: Letters from Bermuda, 1615-1646* (Toronto: Toronto University Press, 1984), p. 391; Grace Steele Woodward, *Pocahontas*, (Norman: University of Oklahoma Press, 1969), pp. 153-155, p.174; Philip L. Barbour, *Pocahontas and Her World* (Boston: Houghton Mifflin, 1969), pp. 153-154.

15 John Pory to Sir Dudley Carleton, September 30, 1619, in Kingsbury, ed., *The Records of the Virginia Company of London*, vol. 3, p. 219. ポリーは同じ手紙のなかで、実際には船のイングランド人船員マーマデュークに手紙を託したと述べている。 *Ibid.*, p. 222.

ア公から発給されているトレジャラー号と偶然出会い、西インドで僚船となったためです。こちらの船、トレジャラー号の方は、去年の4月にイングランドから出帆しましたが、それはスペインとサヴォイア公が和平を結ぶ約1ヶ月前のことだったと思います。そして船はこちらへ、その当時この植民地の総督であり、この船の共同船主でもあったアーゴル船長のところへやって来たのです。諸悪の根源である彼（アーゴル―筆者付記）は、この植民地に対する愛よりも儲けることのほうに愛があるため、新たに食糧と船員を供給し、西インドを巡ってスペイン人から戦利品を鹵獲せよという上記の委任状を持たせ、船を送り出しました<sup>16</sup>。

以上のように、ポリシーによれば当時のトレジャラー号はサヴォイア公から私掠免許を交付されて1618年4月にイングランドを立ち、一旦はヴァージニア植民地にやって来たが、そこで補給を受けて、船の共同船主となっていたアーゴルから西インドでスペイン人を襲うよう指示されて再び出帆していったとのことである。そして西インドにおいて偶然「オランダの軍艦」と出会って僚船となり、1619年の8月末から9月初めにかけてヴァージニアへ戻って来たのであるが、その際に「オランダの軍艦」がアフリカ人を連れて来たことから分かるように、2隻の船は西インドのどこかでスペイン人を襲い、アフリカ人を戦利品として略奪してきたのである。

このトレジャラー号が西インドで働いた略奪行為については、ウォリック伯リッチが経営に深く関わっていたバミューダ植民地側の史料にも説明がある。1619年の夏の終わりにヴァージニア植民地で「非友好的な」扱いを受けて補給を得られなかったトレジャラー号は、その後船主のリッチが農園を所有していたバミューダへ向かったのであるが、その到着をリッチに伝える手紙が存在している。この手紙は、植民地の現状を報告するためにバミューダでリッチに雇われていたジョン・ダットン（John Dutton）が1620年1月に書いたものであるが、そのなかでトレジャラー号については以下のように述べられている。

…我々はトレジャラー号に出会いましたが、船は風雨にさらされひどく痛んでいたため、二度と航海ができそうもない状態で、こちら（バミューダ―筆者付記）で骨を休めているところでした。

以前こちらで補給をしたことがあるダニエル・エルフレッド（Daniel Elfred〔Elfrith―筆者付記〕）氏は、その後もう一度出帆し、略奪を（間違いなくスペイン人に対して）行って、さらにその後にもまたヴァージニアへ行きました。しかし彼が期待していたようなもてなしを受けなかったため、物資の欠乏に陥り、29人の黒人と2梱ずつの穀物と蠟、そしてあまり価値のないわずかな量の獣脂を積んでここへ戻ってきました。船が運んできた人と物資の処分については、その所有者が確定するまでということで、

16 *Ibid.*, p. 219.



今年中は会社が使用することになりました。…<sup>17</sup>

以上のように、トレジャラー号はまずバミューダで補給を行い、その後西インドへ出かけ、「オランダの軍艦」とともに略奪を行い、その後一旦はヴァージニアへ向かい、最後にバミューダへ戻ってきたということである。ダットンの手紙で述べられているトレジャラー号のバミューダでの補給に関しては、前述のポリーの手紙にもヴァージニアで補給を行って西インドへ出かけたとあるので、おそらくヴァージニアで最初の補給を行い、その後バミューダでも補給を行って、西インドへ出かけたものと思われる。

そのこと以上にダットンの手紙で重要な部分は、トレジャラー号がバミューダ植民地に29人の「黒人」を連れ帰ったと述べている点である。このことから、前述のロルフの手紙では触れられていないものの、トレジャラー号も「オランダの軍艦」と一緒に西インドのどこかでアフリカ人奴隷を略奪し、それをヴァージニア植民地へ運んで来たということが分かる。おそらくトレジャラー号は、船の共同所有者であるアーゴルを頼って、「オランダの軍艦」とともにまずヴァージニアへ奴隷を売却に向かったが、「非友好的な扱いを受けたため」うまくいかず、ウォリック伯リッチの関係者がいるバミューダへ向かい、そこで奴隷を処分しようとしたものと思われる。しかしながらなぜ「オランダの軍艦」が奴隷を売却できたのにも関わらず、イングランド船であるトレジャラー号のほうはヴァージニア植民地から「非友好的な扱い」を受けて、奴隷の売却ができなかったのであろうか。またポリーは、前述の手紙でアーゴルを激しく非難しているが、これはなぜなのか。これらの点については後ほど説明を加えることにして、まず「オランダの軍艦」がなぜイングランド船のトレジャラー号と僚船になり、ヴァージニアにやって来たのかという点から見ていきたい。

### 3. 「オランダの軍艦」の正体とアフリカ人の出身地

17世紀初めのイングランドとオランダは、スペインやポルトガルといったカトリック勢力と対抗するために、しばしば協力関係にあった。その点から考えると、「オランダの軍艦」がイングランドの植民地であるヴァージニアへアフリカ人奴隷を売却に行ってもおかしくない。また前述のロルフの手紙にもあるように、「オランダの軍艦」の水先案内人はイングランド人でもあった。しかし「オランダの軍艦」とトレジャラー号が西インドで偶然出会って僚船となり、協力して略奪を行い、その後も一緒にヴァージニアへ向かったという事実は、単にスペインを相手に一時的な協力関係を結んだこと以上の理由があった可能性を示唆している。また前述した通り、イングランド船のトレジャラー号はうまくいかなかったのにも関わらず、「オランダの軍艦」がヴァージニアで奴隷の売却ができた

17 John Dutton to the Earl of Warwick, January 20, 1619/20, in Ives, ed., *The Rich Papers*, pp. 141-142.

のはなぜであろうか。

その謎を解明するきっかけとなったのが、アメリカ大陸のスペイン植民地の歴史について研究していたエンゲル・シュライター (Engel Sluiter) による新史料の発見だった。シュライターはスペインの公文書館で、西南アフリカのポルトガル植民地アンゴラを中心都市ルアンダ (Luanda) から奴隷を積み込み、1619年8月末にメキシコのベラクルス (Vera Cruz) に到着したある奴隷船が支払った奴隷の人頭税に関する会計簿の記録を見つけ、1997年にその内容を発表した。それは以下のようなものだった。

会計簿の貸方欄に、サン・ファン・バウティスタ号 (El San Juan Bautista) という船の船長マヌエル・メンデス・デ・アクニャ (Manuel Mendes de Acunha) が、1619年8月30日に前述の港 (ベラクルス - 筆者付記) へ運んで来た147人分<sup>18</sup>の奴隷に対して支払った8657.875ペソの受領について記載する。…メンデス・デ・アクニャはカンペチェ (Campeche) 沖でイングランドの海賊船<sup>19</sup> (シュライターの英訳文では名詞が複数形の corsairs - 筆者付記) から略奪を受けた。彼がロアンダ (Loanda) で積み込んだ大人や子ども350人のうち…すでに多くの奴隷は乗船中に病気にかかり、また死んでしまい…イングランド人の海賊船が彼に残していったのは、彼がジャマイカで補給しなければならなくなり、その地で売却した24人の少年を含めたとしても、たった147人だった<sup>20</sup>。

以上のように、この会計簿からは、サン・ファン・バウティスタ号という船の船長であるマヌエル・メンデス・デ・アクニャが、西南アフリカのルアンダ (史料ではロアンダ [Loanda]) で積み込み、1619年8月30日にベラクルスに運んできた147人分の奴隷に対して8600ペソほどの税を支払ったことと、船が航海中にユカタン半島のカンペチェ沖でイングランドの海賊船から略奪を受けていたことが明らかになった。このサン・ファン・バウティスタ号はアメリカ大陸にあるスペイン植民地に奴隷を供給していた奴隷船であったが、会計簿にある通り、船の出港地がアフリカのポルトガル植民地であった背景には、1619年当時スペイン王室に上納金を納めることによって奴隷供給契約であるアシエント (asiento) を得ていたのがポルトガルの商人であったという事情がある<sup>21</sup>。

---

18 この147人という人数は、会計簿の後半の説明で分かるように、到着前にジャマイカで売却された24人を含めた人数で、実際にベラクルスに到着したのは123人であったと思われる。

19 本稿では、スペインやポルトガルの視点で叙述する場合には「海賊船」という用語を使用し、イングランドやオランダの視点で叙述する場合には「私掠船」という用語を使用する。

20 Engel Sluiter, "New Light on the '20. and Odd Negroes' Arriving in Virginia, August 1619," *William and Mary Quarterly*, 3<sup>rd</sup> ser., vol. 54 (1997), p. 397. 本文で紹介した会計簿の内容は、シュライターがスペイン語から英訳したものをさらに和訳したものである。

さらにシュライターはこの会計簿から、1619年6月18日から1620年6月21日までの会計年度に6隻の奴隷船がベラクルスに入港したが、海賊船に襲われたのはサン・ファン・パウティスタ号だけであることも明らかにした。その上でシュライターは、会計簿にはイングランドの海賊船による略奪については記載されているが、オランダの海賊船については一切言及がないことを理由に、1619年の夏に西インドでサン・ファン・パウティスタ号を襲った海賊船（複数）はどれもイングランド船であり、それらの海賊船こそがヴァージニア植民地にやって来た2隻の船だったと推論したのである。またシュライターはそのことの傍証として、オランダのフリシンゲンにはエリザベス1世の頃からオランダのスペインからの独立を支援するためにイングランド軍が駐留しており、エリザベス1世はイングランド人が傭兵としてオランダのために働くことも認めていたこと、そしてジェームズ1世によって1604年にイングランドとスペインの講和が結ばれた後も、フリシンゲンにはスペイン船やポルトガル船を襲うことを生業とするイングランド人の海賊が多く住み続け、オランダから私掠免許を得て海賊を続けようとしていたことも指摘した。このように、シュライターの説によれば、ヴァージニア植民地にやって来た「オランダの軍艦」の正体は、オランダ総督から私掠免許を得てフリシンゲンを拠点に活動していたイングランドの私掠船だったということになる<sup>22</sup>。

このシュライターによる新史料の発見とそれに基づく新説は、西アフリカのポルトガル植民地の歴史について研究していたジョン・K・ソートン (John K. Thornton) によって注目され、彼自身の研究によってさらに情報が精査され、事実の確認が進められていった。ソートンは1998年に発表した論文で、シュライターが会計簿によって発見した奴隷船は、西南アフリカのポルトガル植民地アンゴラのルアンダからメキシコのベラクルスへ向かって出帆したポルトガル船サン・ジョアン・パウティスタ号 (O São João Bautista) で、船長はポルトガル人のマヌエル・メンデス・ダ・クニャ (Manuel Mendes da Cunha) であったことのみならず、輸送されていたアフリカ人たちの出身地についても特定した。ソートンの研究によると、奴隷にされたアフリカ人の多くは、アンゴラ植民地のポルトガル人がインバンガラ (Imbangala) と呼ばれるアフリカ人傭兵集団の協力を得て1618年から19

21 スペインとポルトガルは1580年から1640年まで同君連合であり、この時期のスペインが発給するアシエントは主にポルトガル商人に発給されていた。このようなスペイン王室と諸国の民間業者と締結したアシエントについては、布留川正博『奴隷船の世界史』岩波書店、2019年、37-58頁が詳しい。なお布留川はこの著書で、各国の研究者の国際協力によって無料で公開されるようになった奴隷貿易の航海データに関するウェブサイト「奴隷航海」(www.slavevoyages.org) やそのデータベースTSTD1 (Transatlantic Slave Trade Database 1) と同2について紹介しているが、シュライターが発見したサン・ファン・パウティスタ号の航海についても検索可能である。<https://archive.slavevoyages.org/voyage/29252/variables>

22 Sluiter, “New Light on the ‘20. and Odd Negroes’ Arriving in Virginia, August 1619,” pp. 395-398.

年にかけて行った内陸のンドongo王国 (Kingdom of Ndongo) に対する征服戦争で、主にンドongo王国の首都周辺で捕虜にされた人々であった。また彼らは農耕や家畜の世話に長け、市場で商取引を行うような比較的都市化された人々で、奴隷は奴隷船に乗せる前にキリスト教徒にしなければならないという当時のポルトガルの法律に従うルアンダのポルトガル人宣教師から改宗を迫られていたため、キリスト教についても一定の知識を持ち合わせていた人々でもあった。さらにソーントンは、この時のンドongo王国に対する実質的には奴隷狩り戦争とも言える征服戦争で非常に多くの捕虜が獲得されたため、1619年にはブラジルやアメリカ大陸のスペイン植民地へ向けて36隻もの奴隷船がルアンダを出帆したが、サン・ジョアン・パウティスタ号がそのなかの1隻であったことも確認した<sup>23</sup>。

このようなシュライターによる新史料の発見やソーントンの研究が公表されると、新たにジャーナリストのティム・ハシャウ (Tim Hashaw) がそれに関心を示し、研究に参入してきた。彼は以前より、自身もその子孫であると考えているテネシー州東部に暮らすヨーロッパ人とアメリカ先住民とアフリカ人の混血であるメランジヤン (Melungeon) と呼ばれる人々について調査を続けていたが、その調査の過程でメランジヤンの祖先がヴァージニアに連れて来られた初めてのアフリカ人にたどれることを確信したことがその理由だった。その後ソーントンやハシャウは、後述するトレジャラー号の違法海賊事件を裁いた17世紀のイングランドの海事高等法院 (the High Court of Admiralty) の裁判記録や、ヴァージニア会社やバミューダ植民地の史料、またスペインやポルトガル側に残る史料から得られた断片的な情報を突き合わせ、さらにはそれらの史料に登場する個人についての家系図的調査を行うことによって、「オランダの軍艦」あるいは「フラシングの軍艦」とヴァージニア側の史料で呼ばれてきた船が、イングランド船のホワイト・ライオン号 (the White Lion) であったことや、その船長がコーンウォール出身のジョン・コリン・ジョープ (John Colyn Jope) であったこと、そしてトレジャラー号やホワイト・ライオン号の乗組員の多くがイングランド人であったことを突き止め、それらを2007年に出版したそれぞれの著書で公にした (ただしソーントンのものは、リンダ・M・ヘイウッド [Linda M. Heywood] との共著)<sup>24</sup>。

#### 4. トレジャラー号による違法海賊行為

それでは次に、後ほど説明を加えるとした、なぜイングランド船であるにもかかわらずトレジャラー号がヴァージニア植民地から「非友好的な扱い」を受けたのか、またポリーはその手紙においてなぜヴァージニア総督代理であったアーゴルのことを激しく非難していたのかという問題を見ていきたい。

前述したように、トレジャラー号はウォリック伯リッチの指示のもと、1616年からサヴォ

23 John Thornton, "The African Experience of the '20. and Odd Negroes' Arriving in Virginia in 1619," *William and Mary Quarterly*, 3<sup>rd</sup> ser., vol. 55, no. 3 (1998), pp. 421-434.

イア公から得た私掠免許を携えて私掠船として活動していたが、このようなイングランド船による活動は、被害を受けたスペイン側からの報復を招く可能性があり、創設間もないヴァージニア植民地がその標的となることがサンズらヴァージニア会社の幹部たちによって懸念されていた。そのような懸念は、前掲のロルフの手紙にもトレジャラー号からの情報として述べられている。しかしリッチは、自らもヴァージニア会社の出資者であったにもかかわらず、むしろ私掠船による略奪からあがる利益のほうを重視しており、また経営に深く関わっていたバミューダ植民地を私掠船の根拠地として活用しようとも考えていた。さらに彼とともにトレジャラー号を所有していた元船長で、1617年からはヴァージニア植民地代理総督となっていたアーゴルもそれに同調していた。このために、イングランド船のスペイン人に対する略奪行為によってヴァージニア植民地が危険にさらされることを懸念していたサンズ側の人間であったポリーは、手紙でアーゴルを厳しく批判していたのである<sup>25</sup>。

さて、そのポリーの手紙にあるように、1618年4月にイングランドを出帆してヴァージニア植民地にやって来たトレジャラー号は、人員と食糧の補給を受けた後、総督代理のアーゴルの指示によって、スペイン人から略奪をする目的で再び西インドへ出かけていった<sup>26</sup>。

24 Tim Hashaw, "Malungu: The African Origin of the American Melungeons," *Eclectica*, July/August, 2001, <http://www.eclectica.org/v5n3/hashaw.html> (accessed in December 22, 2019); "Mystery of Va.'s First Slaves Is Unlocked 400 Years Later," *The Washington Post*, September 3, 2006, <https://www.washingtonpost.com/archive/politics/2006/09/03/mystery-of-vas-first-slaves-is-unlocked-400-years-later/7015c871-aabd-4ba2-b5ce-7c0955aa0d75/> (accessed in December 11, 2019); Tim Hashaw, *The Birth of Black America: The First African Americans and the Pursuit of Freedom at Jamestown* (New York, N. Y.: Carroll & Graf, 2007); Fritz Lanham, "Book discusses African slaves, their struggle for freedom," *Houston Chronicle*, March 19, 2007, <https://www.chron.com/life/books/article/Book-discusses-African-slaves-their-struggle-for-1635362.php#photo-1185522> (accessed in December 11, 2019); Linda M. Heywood and John K. Thornton, *Central Africans, Atlantic Creoles, and the Foundation of the Americas, 1585-1660* (New York, N. Y.: Cambridge University Press, 2007); Rupa Shenoy, "Pirates brought enslaved Africans to Virginia's shores. Where, exactly, is debatable," *The World*, January 16, 2019, <https://www.pri.org/stories/2019-01-16/pirates-brought-enslaved-africans-virginia-s-shore-where-exactly-debatable> (accessed in December 11, 2019). なお、2000年代の初めにヴァージニア植民地への初のアフリカ人到来に関する研究が進展したのには、2007年にヴァージニア植民地成立400周年が控えていたことが少なからず関係していた。その時も昨年と同様に、歴史の見直しが盛んに行われ、従来植民者や先住民に比べて充分な関心が払われてこなかったアフリカ人についても、その歴史を掘り起こそうとする機運が高まった。

25 Pory to Carleton, in Kingsbury, ed., *The Record of the Virginia Company of London.*, vol. 3, p. 219.

26 *Ibid.*

その時には船長はエルフリスに代わっていたが、船はバミューダでも補給し、その後西インドを航海している1619年の春から夏にかけて、オランダからの私掠免許を携えたホワイト・ライオン号と偶然出会い、僚船となって行動をとるようになった。この2隻が僚船となったのは、実質的にどちらもがイングランド人によって操船されていたイングランドの私掠船だったからである。そして7月の終わりころ、ユカタン半島のカンペチェ沖で、メキシコへアフリカ人奴隷を運んでいたポルトガルの奴隷船サン・ジョアン・パウティスタ号を見つけ、2隻でそれを襲い、50人から60人ほどの奴隷を略奪して、8月末から9月初めにかけてヴァージニアでそれらの奴隷を売却するために戻ってきたのである。トレジャラー号の船長エルフリスにすれば、アーゴルの指示で行った略奪であったため、ヴァージニアでは当然歓迎されると思っていたはずである。

しかしそうはならなかった。事態はトレジャラー号が西インドへ出かけている間に変わっていた。1619年春にスペインによる報復を懸念するヴァージニア会社は、ウォリック伯リッチとともに私掠船による活動に積極的に関わっていたアーゴルを解任し、代わりにジョージ・イヤードリー (George Yeardley) を代理総督にすべくヴァージニア植民地に派遣した。またアーゴルも代理総督を辞任すると、イヤードリーが4月18日に到着する数日前に、逃げるようにウォリック伯リッチが差し向けた船でヴァージニアを離れていた<sup>27</sup>。

そもそも1603年にイングランド王位についたジェームズ1世は、即位後すぐにイングランド船による友好国に対する海賊行為を禁止する布告を出し、前述の通り1604年にはスペインとも講和をしていた<sup>28</sup>。それゆえスペイン船や当時スペインと同君連合であったポルトガル船をねらうイングランド船は、他の国から私掠免許を獲得しなければならなかった。トレジャラー号の場合、それはサヴォイア公から得たものであったが、ポリーの手紙にあるように、トレジャラー号がイングランドを離れた直後、サヴォイア公がスペインと講和したため、トレジャラー号がホワイト・ライオン号とサン・ジョアン・パウティスタ号を襲撃していた時には、サヴォイア公から得た私掠免許はすでに効力を失っていたのである<sup>29</sup>。

航海に出ている船長のエルフリスが、そのことに気づいていたかどうかは分からないが、ウォリック伯リッチやアーゴルの私掠船による略奪行為奨励を懸念していたヴァージニア会社とその意向を代弁する新しいヴァージニア植民地当局にとって、エルフリスのトレジャラー号は、私掠免許が失効していたにもかかわらず西インドで違法な海賊行為を働いて戻ってきた船であった。実際のところ、1619年6月にヴァージニア会社は、

27 Hanna, *Pirate Nests and the Rise of the British Empire, 1570-1740*, pp. 73-76; Hashaw, "Malungu,"; "Samuel Argall," in *Encyclopedia Virginia*, [https://www.encyclopediavirginia.org/Argall\\_Samuel\\_bap\\_1580-1626](https://www.encyclopediavirginia.org/Argall_Samuel_bap_1580-1626) (accessed in December 14, 2019).

28 Hanna, *Pirate Nests and the Rise of the British Empire, 1570-1740*, p. 54; Sluiter, "New Light on the '20 and Odd Negroes' Arriving in Virginia, August 1619," p. 398.

29 Pory to Carleton, in Kingsbury, ed., *The Record of the Virginia Company of London.*, vol. 3, p. 219.

代理総督イヤードリーに対して手紙で、「その船（トレジャラー号－筆者付記）が帰還し  
だいで捕らえ、船の航路とその行動について尋問を行うために周到な命令を出し、このよう  
な案件で求められている関係者全員に対する正義がなし遂げられるようにしていただきた  
い」<sup>30</sup>と命令を出している。この手紙がヴァージニアに届くのと、8月末から9月初めにト  
レジャラー号が帰還したのとどちらが早かったのかは分かっていないが、少なくともロル  
フの手紙に書かれていたように、アーゴルがまだ代理総督であると思ひ込み、「到着直後  
に総督に対し自らの希望を伝え」たにも関わらず、ヴァージニア植民地の住民からは「非  
友好的な扱いを受けて」補給もままならなかったエルフリス一行は、新しい代理総督のイ  
ヤードリーの「ジェームズ・シティまで遡上して来るように」という命令を伝える使者が  
到着するのを待たずに去って行った<sup>31</sup>。その行動を見ると、エルフリスは、自らが危険な  
立場に置かれているという事情を察知していたものと思われる。

しかしながらエルフリスは、ヴァージニアを離れる際に思わぬ失敗を犯した。ウォリッ  
ク伯リッチの指示によって、スペイン人から略奪するために出かけていたと告白する船員  
を残してしまったのである。ヴァージニア植民地当局はすぐさまこの告白を本国のヴァー  
ジニア会社総裁のサンズに伝え、サンズはそれを枢密院やスペイン大使のゴンドマル伯  
爵（1<sup>st</sup> Count of Gondomar）にまで伝えた。サンズはヴァージニア植民地が海賊の根拠地  
になっていると国王から疑われ、ヴァージニア会社の勅許状が取り消されることを恐れて  
いたのである<sup>32</sup>。このサンズによるトレジャラー号による違法海賊行為の報告が、後に海  
事高等法院での裁判にまで発展したため、その裁判記録が残り、ヴァージニアへの初のア  
フリカ人到来という出来事の背景が明らかにされる材料となった。

さて、イヤードリーが率いる新しいヴァージニア植民地当局のトレジャラー号に対する  
対応が厳しいものであったのに対し、「オランダの軍艦」と呼ばれたホワイト・ライオン  
号への対応ははるかに友好的なものだった。ロルフの手紙にあるように、イヤードリーは  
ホワイト・ライオン号が運んできたアフリカ人奴隷を購入しているし、またポリーは手紙  
をオランダに届けるようにホワイト・ライオン号に託してもいる。これは、トレジャラー  
号と一緒に略奪を行ってきたものの、ホワイト・ライオン号のほうはオランダ総督から発  
給された有効な私掠免許を所持していたからだと言えなくもないが、それでも実態はイン  
グランド船であったことを考えると、対応の違いには差がありすぎる。おそらくその理由  
の一つは、ホワイト・ライオン号がヴァージニア会社の出資者ウォリック伯リッチとは無

30 A Letter from the Treasurer and Counsell for Virginia to Sir George Yeardley, June 21, 1619, in *Ibid.*, pp. 146-148.

31 Rolf to Sandys, in *Ibid.*, pp. 243-244.

32 Hanna, *Pirate Nests and the Rise of the British Empire, 1570-1740*, pp. 76-77. しかし結果的には、この違法海賊問題も、1624年にヴァージニア会社が解散させられヴァージニア植民地が王領化する一因となった。

関係の、いわばフリーランスの私掠船だったため、その行動に会社が責任を負う必要はないとの認識が植民地当局にあったためと思われる。そしてもう一つの理由は、ようやくタバコ栽培で存続の目途がたちつつあったヴァージニア植民地にとって、アフリカ人奴隷は労働力として貴重であり、たとえそれがスペイン植民地へ向かう船から略奪されたものであったとしても、入手したかったからではないだろうか。それは、トレジャラー号による違法海賊行為を取り調べるように指令を受けていたイヤードリー自身が、ホワイト・ライオン号から奴隷を購入していることから分かる。それでもやはりイングランドの私掠船とヴァージニア植民地の関係を隠蔽する必要があったため、ロルフはホワイト・ライオン号のことを「オランダの軍艦」と、またポリーは「フラッシングの軍艦」と呼んだものと思われる<sup>33</sup>。

## 5. 人口調査に見る初めてのアフリカ人のその後

それでは最後に、ヴァージニア植民地へ連れて来られた初めてのアフリカ人たちのその後について、初期の植民地で実施された人口調査や、それに関する研究で分かってきたことがらをもとに説明をしたい。

ヴァージニア植民地初の人口調査は1620年3月に実施された。それについてのまとまった研究は、1995年に家系図研究者のウィリアム・ソーンデイル (William Thorndale) によって発表された。しかしソーンデイルは、この調査が1619年3月に実施され、同年5月までの人口変動が反映されたものであると論じたために、しばらくの間ヴァージニア植民地への初のアフリカ人到来についての議論は混乱した。ソーンデイルは、この1619年春に実施された人口調査に32人のアフリカ人が記録されているので、前述のホワイト・ライオン号が8月末に20人数人のアフリカ人を運んで来た時には、すでにヴァージニア植民地にアフリカ人がいたと主張したのである<sup>34</sup>。しかし、後にそれは史料の読み間違いであることが明らかになった。

実際のところ、ソーンデイルが検討した人口調査には「1619年3月初めに実施」と書かれていたが、その一方で1619年4月以降の船でヴァージニア植民地に到着した人々の人数についても記録されていた。このためそこに記録されている人口の内訳を詳細に検討したソーンデイルは、調査結果には1619年5月までに到着した人々の人数もある程度加えられていると判断し、前述の通り、調査は1619年3月に実施され、同年5月までの人口変動が反映されたものであると論じたのである。しかしこの調査が実際に行われた時期について

33 Rolf to Sandys, in Kingsbury, ed., *The Record of the Virginia Company of London.*, vol. 3, pp. 243-244; Pory to Carleton, in *Ibid.*, p. 219.

34 William Thorndale, "The Virginia Census of 1619," *Magazine of Virginia Genealogy*, no. 33 (1995) pp.155-170.



は、考慮しなければならない別の問題があった。それは中世から近世初頭までのイングランドの常用歴では、新年の始まりが聖マリア受胎告知日である3月25日であったという問題である。このため、人口調査が実施されたと書かれている「1619年3月初め」も、実際には1620年3月であったと考えられ、またその方がこの調査に1619年4月以降にヴァージニア植民地へ到着した人々の数（つまりは前年中に到着した人の数）が記録されていることともつじつまが合うということになったのである<sup>35</sup>。

さて、この1620年3月に実施された人口調査によると、当時のヴァージニア植民地の総人口は921人で、そのうちイングランド人かそれ以外のキリスト教徒の成人男性が670人、女性が119人、労働可能な少年が39人、年少の子供が57人の合計885人であった。またこれに加えて、イングランド人のために働いているキリスト教徒以外の者と記録されていた「インディアン」4人、「黒人」男性15人、「黒人」女性17がいた。ただしこの人口調査は、基本的に人数のみの記録であったため、個々人の名前までは分かっていない<sup>36</sup>。

ところで、1619年8月末にホワイト・ライオン号が20数人のアフリカ人をヴァージニア植民地で売却した後、翌1620年3月に人口調査が行われるまでに、他にアフリカ人が到着したという記録はない。それにもかかわらずこの人口調査ではアフリカ人が32人に増えているのはなぜであろうか。この点に関しては、前述の海事高等法院における裁判で、トレジャラー号の航海長であったジョン・ウッド（John Wood）が行った宣誓証言がそのいきさつを伝えている。彼によると、トレジャラー号は28人から30人の「黒人」を乗せてヴァージニア植民地にやって来たものの、食糧を調達できずすぐに出帆したが、ヴァージニアを離れる前に2人か3人の「黒人」を下ろしたとのことである。この「下ろした(caste)」とは、おそらく売却したということであろうが、この証言と前述のパミュエダにいたダットンの手紙にトレジャラー号が29人の「黒人」を運んで来たこととあることを合わせて考えると、1619年8月末から9月にかけて、2隻のイングランド船によって合計50人から60人のアフリカ人がヴァージニア植民地に連れて来られたが、そのうち20数人がホワイト・ライオン号から、また2人か3人がトレジャラー号から植民地側に売却されたということ

35 *Ibid.*, pp. 155-157, 160-165; Beth Austin, "1619: Virginia's First Africans," December 2018, revised August 2019, p. 29, n. 19, <https://hampton.gov/3580/The-1619-Landing-Report-FAQs> (accessed in November 20, 2019); Martha W. McCartney, "A Study of African Americans on Jamestown Island and at Green Spring, 1619-1803" (a report for the National Park Service and Colonial Williamsburg: 2003), p. 8, 34; Heywood and Thornton, *Central Africans, Atlantic Creoles, and the Foundation of the Americas, 1585-1660*, p. 8, n. 10. ソーンデイルも当時のイングランドの常用歴が現在のものと異なることは認識していたが、調査に記録されていた人口の内訳を検討する際に数字の解釈を誤り、結果的に調査の実施時期を1619年3月と誤解してしまった。なお、当時のイングランドの常用歴における新年については、同僚のイギリス近世史研究者上野未央氏のご教示に感謝する。

36 Beth Austin, "1619: Virginia's First Africans," p. 12, 24.

になる。そしてその全員が1620年3月まで生存していたとするならば、それが人口調査に記録されてたいた32人だということになるのである<sup>37</sup>。

ヴァージニア植民地ではその後1624年と1625年にも人口調査が行われた<sup>38</sup>。これらの人口調査からも1619年に到着したアフリカ人について、いくつかのことが明らかになっている。まず1624年2月に実施された人口調査を見ると、「黒人」と記録されているのは男性9人、女性6人、性別不明6人の合計21人と、1623年4月以降に死亡した性別不明の1人である。この1624年の人口調査には、ヨーロッパ系の住民は姓名がすべて記録されているが、「黒人」の場合は12人のファーストネームが分かるのみである。それらを見ると、「エドワード (Edward)」「ピーター (Peter)」「マーグレット (Margrett)」など、ヨーロッパ風の名前となっている。そのうちの1人アンソニー (Anthony) については、翌1625年の人口調査で1621年にヴァージニアにやって来たとして特記されているアントニオ (Antonio) と同一人物と考えられている。他にもこのアンソニーのように、1619年以降にヴァージニアにやって来たアフリカ人がいたとしても、1620年の人口調査で32人を数えていたアフリカ人の数が、1624年にはわずか20人ほどに激減していたことが分かる。その理由として考えられることは、病気による死亡や、1622年3月に発生したパウハタン族の大規模な攻撃で犠牲となった、あるいは他の植民地に売られるか逃亡するかして、いなくなったなどということである<sup>39</sup>。

つぎに翌1625年1月に実施された人口調査を見てみると、「黒人」と記録されているのは、

37 Martha W. McCartney, "New Light on Virginia's First Documented Africans," March 1, 2019, <http://www.historyisfun.org/blog/new-light-on-virginis-first-documented-africans/> (accessed in December 2, 2019); John Dutton to the Earl of Warwick, January 20, 1619/20, in Ives, ed., *The Rich Papers*, p. 141. このトレジャラー号によってヴァージニア植民地に連れて来られたアフリカ人の人数については異論もある。HaywoodとThorntonは、トレジャラー号は1619年8月末から9月初めにヴァージニアからバミューダへ行つたが、1620年2月に再びヴァージニアへ戻り、その際にサン・ジョアン・パウティスタ号から略奪した6人内外のアフリカ人奴隷を改めてヴァージニアへ連れて来たとして論じている。Heywood and Thornton, *Central Africans, Atlantic Creoles, and the Foundation of the Americas, 1585-1660*, pp. 7-8.

38 この1624年と1625年の人口調査も、それぞれ1月と2月に実施されたもので、史料には1623年と1624年と年号は表記されているが、1620年のものと同様に、暦の関係で実際に調査が実施されたのは、1624年と1625年であった。

39 John Camden Hotten, ed., *The Original Lists of Persons of Quality; Emigrants; Religious Exiles; Political Rebels; Serving Men Sold for a Term of Years; Apprentices; Children Stolen; Maidens Pressed; And Others Who Went from Great Britain to the American Plantations, 1600-1700* (New York, N. Y.: Empire State Book, 1880) pp. 172-174, p. 178, 182, 185, 190, 241; Beth Austin, "1619: Virginia's First Africans," p. 12, 26.

男性11人、女性10人、子供2人（1人は男児）の合計23人で、ファーストネームが記録されているのは8人だけである。この23人のうち3人については、1619年以降にヴァージニア植民地にやって来たと特記されている。これらの「黒人」たちは、7軒の家で働かされていたが、それらの7軒のうち5軒は、「白人」の奉公人も多く抱えるエイブラハム・ピアシー (Abraham Piersey) やジョージ・イヤードリーなど農園を経営する有力者たちであった。ちなみにこのピアシーとイヤードリーこそ、前掲のロルフの手紙に出てくる、ヴァージニアに初めて連れて来られたアフリカ人を購入した「岬の商人」と「総督」である<sup>40</sup>。

この1625年の人口調査からは、個々のアフリカ人についてももう少し情報を得ることができる。例えば、子供2人のうちの1人ウィリアム (William) は、1624年の人口調査にも名前があるアンソニー (Anthony/Antoney) とイザベル (Isabella/Isabell) の子供で、1624年の人口調査にはその存在が記録されていないため、1624年からの1年間に生まれたことが分かる。このウィリアムこそ、記録から判断するかぎり、ヴァージニア植民地で生まれた初めてのアフリカ人二世代である。さらにこの1625年の人口調査からは、トレジャラー号で連れて来られ、ウィリアム・ピアース (William Pierce) の家で働かされていると特記されているアンジェロ (Angelo/Angela) という名の「黒人」女性がいたことも分かる。彼女の主人のピアースとは、前述のロルフの手紙に出てくる、トレジャラー号にイヤードリー代理総督の使者としてロルフとともに派遣された人物である。彼がポイント・コンフォートに到着したときにはすでにトレジャラー号はバミューダに向けて出帆していたはずであるが、それにもかかわらず彼はトレジャラー号が「下ろした」アンジェロを手に入っていたのである。このアンジェロは、1619年に到着したアフリカ人のうち唯一乗船してきた船まで判明している人物であるため、昨年の400周年におけるいくつかの行事や博物館の展示ではヴァージニア植民地へ初めて連れて来られたアフリカ人の代表として扱われ、彼女を主人公にした特別な解説も行われていた（次ページ写真2、3参照）<sup>41</sup>。

40 Hotten, ed., *The Original Lists of Persons Who Went from Great Britain to the American Plantations*, pp. 217-218, 222, 224, 229, 241, 244, 258; Beth Austin, "1619: Virginia's First Africans," p. 26; Irene W. D. Hecht, "The Virginia Muster of 1624/5 As a Source of Demographic History," *William and Mary Quarterly*, 3<sup>rd</sup> ser., vol. 30, no. 1 (1973), pp. 77-79; Beth Austin, "1619: Virginia's First Africans," p. 12, 26; Rolf to Sandys, January, 1619/20, in Kingsbury, ed., *The Records of the Virginia Company of London*, vol. 3, p. 243.

41 Hotten, ed., *The Original Lists of Persons Who Went from Great Britain to the American Plantations*, p. 224, 244; Beth Austin, "1619: Virginia's First Africans," pp. 12-13, 26; McCartney, "New Light on Virginia's First Documented Africans," March 1, 2019. なおアンジェロについては、現在ジェームズタウン遺跡でピアース邸跡を「アンジェラ・サイト」("Angela site")と呼んで発掘が続けられており、昨年8月の400周年には彼女を主人公にした解説付きウォーキング・ツアーが実施されていた。https://historicjamestowne.org/archaeology/angela-site/ (accessed in December 2, 2019)



写真2 2019年8月アンジェラ（アンジェロ）を主人公にしたウォーキング・スタディー・ツアーが開催されていたジェームズタウン史跡（筆者撮影）



写真3 野外博物館 Jamestown Settlement で開催されていた初期ヴァージニア植民地に生きたアメリカ先住民、イングランド人、アフリカ人の女性たちをテーマにした企画展“Tenacity”のポスター（筆者撮影。後列左がアンジェラ〔アンジェロ〕）

さて締めくくりに、1619年に初めてヴァージニア植民地に連れて来られたアフリカ人たちの身分が奴隷であったのか、それとも年期契約奉公人だったのかという長く続けられてきたいわゆる「奴隷制起源論争」に一言触れておきたい。この論争において、1619年に到着したアフリカ人たちが年期契約人と同様の身分であったと論じる研究者たちは、ヴァージニアでは1660年代にならないと奴隷の身分を明確に規定した法律が制定されず、またそれ以前には、最終的に自由を獲得した「黒人」も少数ながら存在したということその根拠としている。確かに初期のヴァージニア植民地では「黒人」奉公人の法的身分が

曖昧であったことは否定できない。しかし「黒人」奉公人の圧倒的多数は生涯解放されず、一貫して売買、譲渡、相続の対象とされていたことが史料から判明しており、身分規定の明確な法律があるなしにかかわらず、彼らが終身奉公人である「奴隸」として扱われていたことは明らかである。すでにイングランドの私掠船は、16世紀中からスペイン植民地やポルトガルの奴隸船を襲撃して、略奪した「黒人奴隸」の転売で利益を上げていた。1619年夏にヴァージニアにやって来た2隻のイングランド船も、同じことを行おうとしていたのであり、その際に「黒人奴隸」を購入した側が、特段の理由もなしに奴隸の身分を年期契約奉公人に格上げしたとは考えにくい。また後に解放され、自由を得た「奴隸」が少数いたとしても、それはあくまで個々の所有者による任意の判断の結果であった。ゆえに筆者は、1619年のヴァージニアは、間違いなく「アメリカにおける奴隸制の起源」の一つであると考えている<sup>42</sup>。

## おわりに

以上のように、近年の研究の進展によりヴァージニア植民地への初のアフリカ人到来という出来事の具体的な背景が明らかになってきたが、それによってこの出来事は、もはやアメリカにおける奴隸制の起源という視点からだけでなく、アフリカにおける奴隸狩り戦争、ポルトガルによるアフリカ人奴隸貿易、カトリック諸国とプロテスタント諸国の対立とその副産物としての私掠船の活動、そしてヴァージニア会社とその植民地における内部対立なども複雑に絡み合った時代状況の産物として、より大きな構図から議論されるようになってきている。その歴史的な意味を、どのような文脈で説明し直していくかは、それぞれの歴史研究者の問題意識のありように任されている。

それでは本稿を閉じるにあたり、最近になって驚くべき新説が唱えられていることが判明したので、それを補遺として紹介しておきたい。その新説とは、アフリカ人到着400周年を顕彰するために設立されたヴァージニア州ハンプトン市の非営利団体であるプロジェクト1619年（Project 1619）の顧問を務めている歴史研究者のK・I・ナイト（K. I. Knight）が提唱しているもので、伊達政宗が1613年に遣欧使節を派遣するためにスペイン人の協力を得て建造したガレオン船サン・ファン・パウティスタ号とヴァージニアへ初めて連れて来られたアフリカ人を運んでいたポルトガルの奴隸船が同一の船だという説である。当

42 John C. Coombs, "Others Not Christians in the Service of the English": Interpreting the Status of Africans and African Americans in Early Virginia," *The Virginia Magazine of History and Biography*, vol. 127, no.3 (2019), pp. 212-238. なお奴隸制起源論争については、以下を参照。Winthrop D. Jordan, *White Over Black: American Attitudes Toward the Negro, 1500-1812* (Chapel Hill, N. C.: University of North Carolina Press, 1968) pp. 3-98; Alden T. Vaughan, *Roots of American Racism: Essays on the Colonial Experience* (New York, N. Y.: Oxford University Press, 1995), pp. 136-174.

初筆者は、「洗礼者聖ヨハネ」という他にもありそうな船名が同じというだけでこの説を唱えることには無理があると考えていたが、ナイトがそのことを宮城県石巻市にあるサン・ファン・パウティスタ号の復元船を展示している宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）にまで伝えていることを知り<sup>43</sup>、念のため伊達政宗のサン・ファン・パウティスタ号に関する日本での研究とナイトの説を比較してみることにした。

まず日本の研究では、伊達政宗のサン・ファン・パウティスタ号は、ヨーロッパから帰還する支倉常長をメキシコのアカプルコからフィリピンのマニラへ運んだ後、マニラをオランダの攻撃から守るスペイン艦隊に編入する目的で、1618年8月にマニラのスペイン総督に売却されたということまではスペイン側の史料で確認できるが、その後の消息は不明であるとされていることが分かった<sup>44</sup>。これに対してナイトは、サン・ファン・パウティスタ号を購入したマニラの総督は、船をスペインに運び国王に献上したが、その後船は前述のスペイン貴族で当時駐イギリス大使であったゴンドマル伯爵の手に渡り、最終的に彼の親族であるメンデス・デ・アクニャ（メンデス・ダ・クニャ）が船長を務めるアンゴラ発の奴隷船になったと説明している<sup>45</sup>。

果たしてこの説には説得力があるのだろうか。ナイトの著書で典拠を示す註を確認したが、註の記載が不十分であるため、残念ながらどのような史料を使ってナイトの説が構築されているのか明確にならなかった。また1618年8月まではマニラにあったことが史料で分かるサン・ファン・パウティスタ号が、その後1年も経たないうちにスペインに運ばれ、さらに南西アフリカのアンゴラにまで運ばれて、1619年のおそらく5月ころメキシコに向けてルアンダを出帆した奴隷船になるのは、やや時間的に無理があるようにも思われる。過日筆者は石巻市の「サン・ファン館」へ赴き、慶長遣欧使節を乗せたサン・ファン・パウティスタ号の復元船を見学してきた（次ページ写真4参照）。確かに当時としてはなかなかの大船で、アンゴラから350人の奴隷を運んだサン・ジョアン・パウティスタ号と同じような規模の船であることは確認できた<sup>46</sup>。しかしその上で言えることは、ほぼ同時期に、全く同じ名前の、大きさも同じくらいの船が、地球の別々の場所に存在していたことを伝える史料があるということだけである。これは単なる偶然の一致か、それともナイトが唱えるような驚くべき新事実なのか、現状ではそれを判断する材料が筆者にはない。

---

43 「サン・ファン号、奴隷運ぶ？マニラで売却後の足跡に新説米歴史家提唱」『河北新報』2018年11月26日。 [https://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201811/20181126\\_13022.html](https://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201811/20181126_13022.html) (accessed in December 12, 2019)

44 濱田直嗣『政宗の夢 常長の現－慶長使節四〇〇年』（河北新報出版センター、2012年）244－248頁。佐々木徹『伊達政宗と慶長遣欧使節』（大崎八幡宮、2019年）39頁、註103。

45 K. I. Knight, *Unveiled the Twenty & Odd: Documenting the First Africans in England's America 1619-1625 and Beyond*, First Freedom Publishing, 2019, pp. 22-25.



写真4 宮城県石巻市のサン・ファン館に係留されている  
サン・ファン・パウティスタ号の復元船 (筆者撮影)

- 
- 46 伊達政宗が建造を命じたサン・ファン・パウティスタ号は、支倉の遣欧使節に同行した宣教師ルイス・ソテロが「500トンを超えるナオ船」と伝えている。佐々木『伊達政宗と慶長遣欧使節』25頁および慶長遣欧使節船協会『復元船サン・ファン・パウティスタ号大図鑑1990－2021』（河北新報出版センター、2019年）を参照。500トンの船は当時としては大型船であり、このソテロの証言に基づいて復元された石巻のサン・ファン・パウティスタ号も、内部が船倉、上甲板、遮浪甲板の三重構造となっており、十分に多くの人間を運ぶことができる規模である。ただし船の大きさを伝える証言はソテロのものしかなく、船の建造期間がわずか45日と極めて短かったと史料が伝えていることとも考え合わせると、ソテロの船の大きさについての証言には疑問もある。なお1993年に復元された石巻のサン・ファン・パウティスタ号は、2011年3月の東日本大震災の際の津波による損傷と老朽化のために、2021年に解体が予定されている。

# The First Africans' Arrival in Virginia: The Recent Scholarship and New Explanations

Madoka Sato

Last year, 2019, was the 400<sup>th</sup> anniversary of the first enslaved Africans brought to the English North American colony of Virginia. And I had a chance to visit historical places like Jamestown and Point Comfort in Hampton, Virginia, which were historically related to the event, in late August at about the same time of the year the first Africans arrived 400 years ago. There I could find intriguing explanations about the first Africans' arrival I had never known in museums and historic sites where special commemorating exhibitions and events were being held. The explanation of Japanese books on the topic are usually very short and as simple as only stating that the first Africans, about 20 of all, were brought to Virginia by a "Dutch" ship in 1619. Whereas, those explanations in museums and historic sites I encountered, based on the recent scholarship, were much more informative. The outline of them are as follows below.

In late August of 1619, nearly 30 enslaved Africans were brought to Point Comfort in Virginia by the English privateer ship *White Lion* carrying Dutch letters of marque from the Prince of Orange. The ship sold those Africans to Virginia Company officials in return for supplies there. A few days later, another English privateer ship, the *Treasurer*, carrying letters of marque from the Duke of Savoy arrived and soon departed for Bermuda. But the ship also left 2 or 3 additional Africans in Virginia. Those Africans were the first documented Africans in a mainland English North American colony.

The enslaved Africans brought to Virginia in 1619 were probably captured from the Kingdom of Ndongo in West Central Africa by Portuguese colonizers allied with local African mercenaries. At Luanda, Angola, the Portuguese slave ship called *São João Bautista* (or *San Juan Bautista* in Spanish) departed with 350 enslaved captives from Ndongo for Vera Cruz, Mexico in late May or early June of 1619. Before the slave ship arrive its destination, it was attacked by the English privateer ships *White Lion* and *Treasurer* in the Gulf of Mexico in late July or early August. The English privateers stole around 60 of the human cargo from the slave ship and sailed for Virginia to sell them.

In this paper, I examine how researchers could create these intriguing and detailed explanations about the first Africans' arrival above by reviewing available historical documents and recent historical, genealogical, and demographical scholarship on the topic to share updated information with other Japanese scholars.